

「源語梯」の問題（要旨）

井上 豊

「源語梯」は近世中期に於て「源氏物語」の辞書で、著者は明らかでない。五井純禎（蘭洲）の著した「源語誌」を基にしたもので、天明四年刊行され、文政六年にも再刊されているが、「源語誌」は稿本のまま伝わり未刊に終わった。「源語誌」の稿本は阿波国文庫に伝っていたが、近年焼失したらしい。

「源語誌」「源語梯」とともに「国書解題」をはじめ、藤田徳太郎著「源氏物語書目集覽」、重松信弘氏の「源氏物語研究史」、等に簡単に紹介されているが、相互の関係について問題があり、「源語梯」の意義についても誤解があるようであるから、これらの点を中心に簡単に考察する。

「源語誌」と「源語梯」との関係については、文政六年の「源語梯」再刻本に附載された中井竹山の「源語梯辨」に詳しく、竹山の言葉によると、「源語梯」は「源語誌」の著者五井純禎の歿後何人が勝手に改訂を加えて刊行したもので、すべて校

計の余に成り序も附言も仮託だという。竹山は書肆を呼んで詰ったところ、書肆が百方陳謝につとめたので、序や本文を削り竹山の「辨」を加えて再刊を許した、とある。「辨」は「源語梯」の初板がでた天明四年の翌年に書かれている。竹山の言葉でみると、「源語梯」の刊行は全く悪意に基くものごとく、堤朝風の「本朝諸名家著述書目録」（近代名家著述目録）には、五井蘭洲の條に、「梓行ノ源語梯ハ是書（源語誌）ヲ盜刻セル也」と注し、近代になってからも「漢学者伝記集成」に、「狡猾利を貪るもの、蘭洲の源語誌を盗み、其の顯署を改刻せる也と云ふ」などあるのは、みな竹山の言に従ったものである。しかし「淡路の国犬上川のほとりなるなかつかさがるす」とした「源語梯序」及び、「浪華国黄備園主人識」とある「源語梯」附言によつてみて、至極のんびりしたことな

くものようには受取れない。附言の筆者黄備園主人は医家で和学を好み、書肆の請にまかせて校刊の任に当たつたらしく、間違のもとには恐らく書肆にあるのであろう。竹山の「辨」も書肆の言をそのまま信じたような点があり、「源語梯」全体を悪意の所産とみるのは当らぬように思う。竹山と蘭洲とは懷徳書院を通じて深い関係があり、師弟関係もあつた上に、蘭洲の歿後竹山が遺稿の整理を嘱せられていたので、竹山の立腹は無理からぬ点があるが、竹山の「辨」をそのままに信用することはできない。

「源語梯」の内容は、「源氏物語」から抽出した語句をいろは順に並べ、更に虚詞人事、天地時候、人倫支体、生殖氣形、服食器財、の五部に分つて解釈を加えたもので、契沖を尊び古註に対しては批判的になつてゐる。語釈は概ね簡潔的確、擬古文制作の爲の用意も手伝つて文脈を顧慮し用例を重んじてゐる。語彙も比較的豊富で、啓蒙的ながら源氏物語辞典としての意義は大きい。（尤も功の大半は「源語誌」の著者五井純禎に歸すべきであらう。）

附記。紙数の関係で「源語梯」との比較は省略する。

—— 武藏野女子短期大学教授 ——